







Project E01	地域教育専攻 異文化コミュニケーション体験と国際理解教育			
メンバー	[学生] 地域プロジェクトⅢ 1407 茶木 優奈, 1413 山下 涼風, 1418 川村 真生, 1423 丹野 真帆, 1424 佐藤 憧佳, 1439 熊谷 球人, 1441 梅田 沙莉, 1444 田代 桂大, 1445 板垣 聡一郎 地域プロジェクトⅣ 0401 和田 万葉, 0418 鷹崎 浩太郎, 0424 佐々木 果音, 0426 武田 佳乃, 0429 伊東 莉々香, 0431 菅原 涼成, 0432 葛西 大, 0437 工藤 未来, 0442 仲村 健太郎, 0443 道券 惣士, 1444 田代 桂大 [担当教員] ◎石森 広美 先生 ・ 石井 洋 先生			
<p>【背景】 国際理解及び異文化理解, 多文化共生, 海外への関心意欲が高い学生が, 海外の教育事情や現地の生活や文化について学ぶため, 実際の海外というフィールドで教育現場を見学し, 関係者との交流学习を行うことで, 学びを深めようと始動した地域教育専攻の新規プロジェクトである。</p> <p>【目的】 海外における教育体験を通じて, 教育の多様性を理解し, 日本の教育を省察するとともに, 今日のグローバル社会における多文化共生の重要性と異文化コミュニケーション能力の必要性を理解すること。また, 将来, 国際理解教育を実践できる資質・能力を身につけること。</p> <p>【概要】 海外の小中学校・大学(教員養成大学等)において, 現地の教育現場を見学・観察し, 教員や児童生徒・学生との交流を通して, グローバル社会, そして多文化共生社会の構成員としての成長を促す教育を学ぶ。</p>				
<table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>【プロセスと成果】</p> <p>シンガポール </p> <p>○事前指導を通して →高学力を保つシンガポールの教育事情やシステムに加え, 社会や文化について理解を深め, 現状や課題を把握することができた。 →現地の児童生徒との交流に向けて, 日本文化を振り返ったことで, 母国である日本を見つめ直すきっかけになった。</p> <p>○体験活動を通して →実際の多文化・多民族の学校や児童生徒の様子を見ることができた。 →現地の教職員の方々との交流から, 学校現場での子どもたちへの具体的な異文化理解の促進方法を知ることができた。 →将来教員として, 国際理解教育を実践する際に活用できる資料や教材を集めることができた。 →帰国後, 学生の実習校を含む道南地域の小学校において, 海外体験で学んだことを活かした授業実践を行うことができた。</p> </td> <td style="width: 50%; vertical-align: top;"> <p>カンボジア </p> <p>○事前指導, 体験活動を通して →世界の教育事情を他人事ではなく, 自分事として知ることができた。 →カンボジアと日本の教育を比較し, 日本の教育の良い点(学習形態, 学習活動の活用等)にも目を向け, 物事を批判的に, かつ肯定的に捉えられるようになった。 →現地の子どもたちと交流し, 日本の文化(折り紙等)を体験させることができた。 →将来教員として, 国際理解教育を実践する際に活用できる資料や教材を集めることができた。</p> <p>○教員養成大学での観察, 学生との交流を通して →将来教員として, 自身の見聞きしたことを伝え, 子どもたちの世界を広げられる思考や視野が格段に広がった。 →将来教員として, 世界で協力し, コミュニケーションをとることができる仲間を増やすことができた。</p> </td> </tr> </table>			<p>【プロセスと成果】</p> <p>シンガポール </p> <p>○事前指導を通して →高学力を保つシンガポールの教育事情やシステムに加え, 社会や文化について理解を深め, 現状や課題を把握することができた。 →現地の児童生徒との交流に向けて, 日本文化を振り返ったことで, 母国である日本を見つめ直すきっかけになった。</p> <p>○体験活動を通して →実際の多文化・多民族の学校や児童生徒の様子を見ることができた。 →現地の教職員の方々との交流から, 学校現場での子どもたちへの具体的な異文化理解の促進方法を知ることができた。 →将来教員として, 国際理解教育を実践する際に活用できる資料や教材を集めることができた。 →帰国後, 学生の実習校を含む道南地域の小学校において, 海外体験で学んだことを活かした授業実践を行うことができた。</p>	<p>カンボジア </p> <p>○事前指導, 体験活動を通して →世界の教育事情を他人事ではなく, 自分事として知ることができた。 →カンボジアと日本の教育を比較し, 日本の教育の良い点(学習形態, 学習活動の活用等)にも目を向け, 物事を批判的に, かつ肯定的に捉えられるようになった。 →現地の子どもたちと交流し, 日本の文化(折り紙等)を体験させることができた。 →将来教員として, 国際理解教育を実践する際に活用できる資料や教材を集めることができた。</p> <p>○教員養成大学での観察, 学生との交流を通して →将来教員として, 自身の見聞きしたことを伝え, 子どもたちの世界を広げられる思考や視野が格段に広がった。 →将来教員として, 世界で協力し, コミュニケーションをとることができる仲間を増やすことができた。</p>
<p>【プロセスと成果】</p> <p>シンガポール </p> <p>○事前指導を通して →高学力を保つシンガポールの教育事情やシステムに加え, 社会や文化について理解を深め, 現状や課題を把握することができた。 →現地の児童生徒との交流に向けて, 日本文化を振り返ったことで, 母国である日本を見つめ直すきっかけになった。</p> <p>○体験活動を通して →実際の多文化・多民族の学校や児童生徒の様子を見ることができた。 →現地の教職員の方々との交流から, 学校現場での子どもたちへの具体的な異文化理解の促進方法を知ることができた。 →将来教員として, 国際理解教育を実践する際に活用できる資料や教材を集めることができた。 →帰国後, 学生の実習校を含む道南地域の小学校において, 海外体験で学んだことを活かした授業実践を行うことができた。</p>	<p>カンボジア </p> <p>○事前指導, 体験活動を通して →世界の教育事情を他人事ではなく, 自分事として知ることができた。 →カンボジアと日本の教育を比較し, 日本の教育の良い点(学習形態, 学習活動の活用等)にも目を向け, 物事を批判的に, かつ肯定的に捉えられるようになった。 →現地の子どもたちと交流し, 日本の文化(折り紙等)を体験させることができた。 →将来教員として, 国際理解教育を実践する際に活用できる資料や教材を集めることができた。</p> <p>○教員養成大学での観察, 学生との交流を通して →将来教員として, 自身の見聞きしたことを伝え, 子どもたちの世界を広げられる思考や視野が格段に広がった。 →将来教員として, 世界で協力し, コミュニケーションをとることができる仲間を増やすことができた。</p>			



【シンガポールの小学校での異文化交流】



【カンボジアの小学校での異文化交流】

【総括・今後の課題】

○成果・総括

- ・コミュニケーションをとる際には、日本人同士でもそうではなくても、自分が相手のことを理解しようとする姿勢に加えて、自分のこともよく理解し、それを相手に伝えようとする姿勢も必要である(自己理解・他者理解)。
- ・子どもたちや教育に対する教師の思いや願いは、世界で共通している。教師を目指す者あるいは一教師として、国を越えて互いに学び合おうとする気持ちや姿勢が大切である。
- ・学生として、また、将来は教員として、今回得た学びを日本の教育に還元するためにはどうすべきかを常に考え続ける意識が不可欠である。
- ・現地の学生や教職員との交流を通して、日本では得られない異文化理解を深めたことで、体験的な学習から得られる本当の価値を学んだ。

○課題

- ・多様な訛りのある英語への学生の対応力が低かった。特にカンボジアの公用語がクメール語であり、その影響は大きかった。
- ・学生の英語力が低く(個人差有)、自信の無さから教員や通訳(日本語—クメール語)に頼ってしまったり、積極的に発言したりできない場面が多かった。
- ・日本の教育事情について、学生の理解度が低く、知識も少ないことから、現地の教職員に十分な説明ができなかった。母国(日本国)に対する知識が不足しており、海外で日本のことを発信できるよう自国のことについてもしっかり学習する必要性を感じた。

【地域からの評価】

★シンガポールとカンボジアの先生方からの評価★

- ・革新し続けるシンガポールの教育を日本の教員志望の学生と共有できたことは意義深い(シンガポール、中学校校長より)
- ・教員を目指す学生同士が交流し、学び合うこのような機会は大変貴重である。今後もこのような交流を継続していきたい(カンボジア・大学教員より)

★ポスター発表に参加した方々からの評価★

- ・海外での授業観察や児童生徒との関わりから、日本の文化や教育を振り返ることができると知り、異文化理解や多文化共生という視点は教育現場においても大切であると感じた。私も海外の教育について関心を持つことができた。
- ・こういう海外の学校に行く授業があれば、自分も参加したい。とても貴重な機会だと思う。
- ・内容も発表の仕方も素晴らしい。両国の活動はどちらもプロセスと成果が明確で分かりやすかった。
- ・国際理解において自国を理解することも大切だと学んだ。国が違っても教育に対する思いは同じだと知り、国家間での情報共有の重要性がわかった。

【その他】スケジュール

■シンガポール

- 事前指導 4～8月
- ・シンガポールの社会や教育事情理解 等
- 体験活動 8月5～10日(4泊6日)
- ・シンガポールの教育事情を含む現地理解
- ・小・中学校の授業観察、児童生徒との異文化交流
- ・シンガポール国立大学生との交流、大学見学
- ・教職員とのディスカッション

事後指導 10～2月

- ・道南地域の小学校での国際理解授業実践 等

■カンボジア

- 事前指導 10～11月
- ・カンボジアの社会や教育事情理解 等
- 体験活動 11月20～26日(5泊7日)
- ・カンボジアの教育事情を含む現地理解
- ・小・中学校の授業観察、児童生徒との異文化交流
- ・バタンバン教育大学での授業見学、交流活動
- ・教職員とのディスカッション

事後指導 12月～2月

- ・国際理解教育学会での指導案発表 等

Project E02	地域協働専攻 地域政策グループ ～我が町にある「市場の存在意味」から 新たな町おこしを考える～
メンバー	[学 生] 鎌田 帆南/南 優希/バゲンダアビガイル、オブザーバー(4名) [担当教員] 金鉉善
<p>【背景】 大型スーパーなどが町のあらゆる所にできているにもかかわらず、市場は町のシンボルとして存在している。これは日本だけではなく、世界においても市場はその町のシンボルとして存在感を放っている。</p> <p>【目的】 そこで、町にとって、市場の存在意味について調査し、そこから新たな町おこしを提案する。また、韓国・ソウルにあるチョンルン市場で交流イベントに参加し、自らが韓国の関係人口(移住する「定住人口」でもなく、観光に来た「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様にかかわる人のこと)になる。</p> <p>【概要】 前期は市場の存在意味についての事前調査と交流イベントで出店するブースの準備を行った。 9月中旬に韓国・ソウルに赴き、まずはソウルの大規模な市場を観察し調査をした。 そして後半のチョンルン市場での交流イベントでは4つのブースを担当し、集客の対象者を子どもと大人に分け、日本文化の体験を企画した。これは日本の縁日をイメージしており、ぷよぷよボールすくい(子ども向け)、うちわづくり(子ども向け)、だるまの目入れ体験(大人向け)、茶道体験(大人向け)の4つのチームに分けて企画した。ブースは非営利を目的とし、募金活動を併せて行った。イベントを行ったチョンルン市場の商人会の方々の協力を得てブースの出店をさせていただき、イベント当日は、韓国人で日本語を専攻している現地の大学生に通訳として参加していただいた。また、本学函館校のスタディツアーのメンバーと現地で合流し、ブース出店のスタッフとして協力していただいた。</p>	
<p>【プロセスと成果】</p> <p><前期の事前準備> 前期は市場の存在意味についての事前調査として、メンバー各々が「市場とは何なのか?」についてインターネットなどを用いて調査した。結果として、多種多様な商品を大量に流通させるために、安定したネットワークを築き、適正な価格で売買されるための公共性の高い重要な役割を担っていると分かった。 また、前期はブース出店の準備として、ブースで使う備品の準備や小道具の作成を行った。具体的には茶道の道具の確保や、うちわ作成のための絵の具やスタンプ台を購入した。また、より日本の縁日のイメージに近づけるため、ガーランドや旗などを自作し、現地のブース装飾のための準備も行った。</p> <p><交流イベントの成果と課題点> 夏季休業中の9月に韓国に赴き、大規模な市場の観察をした後に、チョンルン市場での交流イベントに参加した。イベント当日の募金活動では152,350ウォン(日本円で約1万5000円ほど)を集めることができた。4つのブースはどれも大人気で、想像を超えた集客のために売り切れや備品が足りなくなってしまう、その対応が困難だった。私たちプロジェクトメンバーと、当日参加のスタディツアーメンバーの事前の情報共有が不足していたために現地で補う必要があった。</p> <p><市場調査の結果> ・広蔵(カンジャン)→多くの観光客(若者)、食べ物がほとんど、とても狭く入り組んだ道 ・東廟(トンミョ)→若者が少ない、衣料品や日用品を扱っている、雨天のため道の出店がなかった ・南大門(ナンデムン)→観光客が多い(中高年)、衣料品・装飾品・小物が多い、道はまっすぐ ・明洞(ミョンドン)→多くの観光客(日本人が多い)、なんでもある、夜も明るい、日本語を話せる店員さんが非常に多い</p>	



だるま販売の様子



茶道体験の様子

【総括と反省・今後の課題】

◎一週間ほどの滞在で世代を問わず多くの韓国の方々と交流をすることができ、とてもいい経験となった。市場によって特徴が異なるのは、それぞれ地域に適して発達してきたからということが分かり、市場は地域を活性化させるのに必要不可欠な存在であると再認識できた。

◎関係人口になるというもう一つの目標には達成できたメンバーとそうでないメンバーがいた。この違いは言語の壁や文化の違いが大きく影響しており、「失礼な言動をしてしまうのではないか？」という不安から、積極的に関わり合いになることができないということがあった。目標を達成できたメンバーは、「次回渡韓したときにはもう一度訪ねたい」と思う店ができたと振り返っている。

◎このプロジェクトのテーマである、「新たな町おこしを考える」活動はすることができなかった。

◎このプロジェクトは初めての試みであったこともあり、プロジェクトの運営において情報共有の不足が多く、メンバーと協力者間でうまく連携ができておらず、その結果として商人会の方や通訳の大学生に迷惑をかけてしまった。今後は、学生内だけでなく、協力してくださる方々にも連絡事項が伝わるような工夫が必要である。

【地域からの評価】

通訳をしてくださった韓国の大学生からフィードバックをいただいた。

<良かった点>

- ・他国でのイベントを1から企画したのが本当にすごかったし、市場の雰囲気合うイベントだった。
- ・学生中心の活動だったのがよかった。
- ・子どもだけでなく大人も楽しめるイベントだったのがよかった。

<改善する点>

- ・責任の所在が不明である。引率の先生とコミュニケーションをとれていないと感じた。学生と先生の責任の範囲を決めておけば、混乱がなくなるのではないか。
- ・臨機応変な運営が多かったため、次回はもっと組織的な方がいいのではないか。

【その他】

◎年間スケジュール

- 5月 市場についての学習、プロジェクト考案
- 6月 ブースのシミュレーション
- 7月 小道具の作成
- 8月 最終確認、事前情報の入手
- 9月 韓国に滞在
(9月18日～25日)
- 10月～ 調査結果のまとめ・反省など

Project	地域協働専攻 国際協働グループ
	外国にルーツを持つ児童・生徒への 日本語学習と教科学習の連携を支援するプロジェクト
メンバー	[学 生] 晴山寧乃、鈴木飛雄馬、大橋恵那、阿部明歩 (協力者: 中居美穂) [担当教員] 佐藤香織

【背景】

外国にルーツを持つ児童・生徒への日本語学習支援は日本語教育における大きな課題の一つであり、函館の小学校・中学校・高校には日本語学習支援を必要としている児童・生徒が在籍している。

また、今年度からは高校でも支援が加わったが、高校の学習内容は高度であり、日本語学習と教科学習を連携させた支援の重要性がより高まっている。

【目的】

- ・児童・生徒の日本語能力の向上
- ・支援実施者の日本語教育実践
- ・地域の教育機関・日本語支援との連携/ 日本語学習と教科学習の連携

【概要】

函館市内の小学校、中学校、高校にいる日本語学習支援を必要としている児童・生徒のもとへ行き、日本語学習支援、入り込んでの授業支援を行った。

【プロセスと成果】

前期では、小・中学校、高校への日本語学習支援を行った。後期では、前期に引き続き小・中学校、高校へ日本語学習支援を行った。また、F中学校Oさんに向けて、社会の自作教材を作成・実施した。

① F中学校 Nさん

- ・対象生徒: アフガニスタン出身 中学校2年生(2022年10月から学校支援開始)
- ・支援内容: 国語、社会、英語、技能教科の入り込み支援、数学、理科の取り出し支援
- ・入り込み支援では、難しい言葉をやさしい日本語や英語訳にして授業に参加できるように行った。また、取り出し支援では、インターネットからの無料の計算プリントを解かせ、算数知識の把握と成長に繋げた。

② F中学校 Oさん

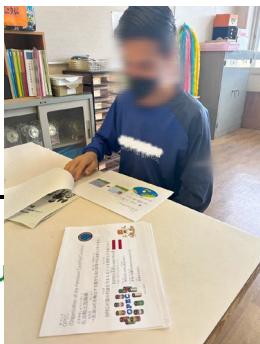
- ・対象生徒: アフガニスタン出身、中学校3年生(2022年10月から学校支援開始)
- ・支援内容: 社会、英語、技能教科の入り込み支援、国語、数学、理科の取り出し支援
- ・取り出し支援では、アプリケーションを用いて九九などの計算を行い、社会に出た際に役に立つ知識を身に付けることができた。また、日常会話能力の向上が見られ日本語の間違いを自ら訂正することが出来た。

③ K小学校 Aさん

- ・対象児童: 中国出身、小学6年生(2022年12月から支援開始)
- ・算数、理科の入り込み
- ・漢字にふりがなを振ることを行わなくても、自力で単語や文を読めるようになった。

④ S高校 Aさん

- ・対象生徒: ネパール出身、高校年生(2023年5月から支援開始)
- ・言語文化、公共、保健の入り込み支援
- ・日本語能力の向上で板書力と漢字力がアップし、支援者の補足説明なしでも授業理解出来るようになり、テストの点も上昇した。また、信頼関係を築き、分からない部分を聞きやすい関係性を作ることが出来た。



【総括と反省・今後の課題】

① F中学校 Nさん

入り込み支援では、教科の内容の難易度が変わるため、学習用語の増加と支援することが高度化している。そのため、支援者の事前準備が必要になってくる。また、取り出し支援では、対象生徒の教科内容に関する概念や手順の理解が不十分である。例えば、算数では足し算引き算の計算は出来るものの、かけ算割り算の概念や計算方法は乏しいため、概念や手順から学習できるように教えることが必要である。

② F中学校 Oさん

社会、英語、技能教科の入り込み支援はしており、取り出し支援の教科は支援者と行っているものも学習にも限度が存在する。そのため、教科によって学習状況に偏りが発生している。支援者も教えられるように、事前に準備することや教員との連携を怠らないように支援を行うようにする。また、自作教材を実践してみて、意欲的に取り組む姿勢が見られて良かった。他にも、全2回実施したが2回目の時に、1回目で行ったときのことを思い出して振り返ることが出来ており、行う意義を見出すことが出来た。

③ K小学校 Aさん

生徒同士でコミュニケーションを取ることが不足しているため、対象児童とクラスメイトのコミュニケーションの輪を作成するために支援者介入してサポートを行う必要性がある。また、文章を書くことがまだ困難であるため、翻訳機能を使用し、対象児童が何の文を書きたいのかを知り、支援者がやさしい日本語に置き換えて文章を書くことに挑戦させるようにする。

④ S高校 Aさん

社会や古典などの文化的に違いがあるものはイメージしづらいため、今後支援方法を模索して行く必要がある。

全体的な今後の課題としては、その他の機関や学校との対象者の情報共有と連携を怠らないことと支援者が参加しなくても、1人で授業に参加できるようになるために、支援者がサポートしていくことが重要になる。そのため、支援者同士で情報交換を行いつつ、自立を促した支援方法や教材を実践していき、対象者に適したものを見つけていくことが今後の課題となる。

【地域からの評価】

支援や教材作成を通して、支援先の教員の方々からお褒めの言葉を頂きました。

(以下コメント)

「大学生の入り込み支援は、高等学校の必修科目の習得にとって絶対必要な対応です。通常授業の前後での教科用語・表現の事前準備を綿密に行うことで生徒が学習参加に前向きになり大変有効であったと思います。(準備が大変であったと思います)また、教材の工夫や日本語のインプットとアウトプットの活動が工夫されていた点も大変良かったと思います。」

「継続的に貴重な時間を割いて準備をし、学校まで通い、子供達と真摯に向き合い寄り添ってくれている姿勢には頭が下がります。発表を聞いて課題意識を持って取り組んでいることも分かり感心しました。子供達にとっては年の近い学生さんたちとの触れあいは多面的にも意義深く、自分の将来のロールモデルにもなっているのではないかと感じています。引き続きの活動に期待しております。」

【その他】

年間スケジュール

4月～ 支援活動

8月 中間発表会

10月～ 支援活動

11・12・1月 教材作成

2月 最終発表会
報告書作成

Project	地域協働専攻 国際協働グループ
	函館の国際交流の課題研究 ～はこだて国際民俗芸術祭を手がかりに～

メンバー	[学 生] 上山 旺奨/城戸 桃子/吉井 さつき [担当教員] 河 錬洙
------	---

【背景】

函館市の元町公園で毎年8月5日から通常1週間開催される「はこだて国際民俗芸術祭」が研究のフィールドである。昨年度は「函館の国際交流の現状と課題」のテーマをもとに、現場での国際交流をスタッフの役割から体験し、学生なりの視点で以下を函館の国際交流に必要な視点として結論づけた。

(現状) 芸術祭に関わる人々の想いを記録し、引き継ぐ次世代の存在が必要とされている。*

(課題) 今後の次世代を担う可能性がある本プロジェクトの活動方針が曖昧で、計画を立てることすら難しい。

*補足: 昨年度の「地域プロジェクト成果報告書(A-12)」の「次年度の活動提案」から修正・進展があります。

【目的】

はこだて国際民俗芸術祭」が100年続くために、

- ① 芸術祭に関わる学生(次世代)の声を記録し残したい。
- ② 今後の本地域プロジェクトに、芸術祭継続の効果が高まる活動を提案したい。

【概要】

前年度に引き続き2名、新規1名の計3名で活動する。期間は2023年4月から2023年9月(前期)である。昨年の活動で発見した気づきから、研究テーマの成果の解決につながる提案(来年やりたいこと)を芸術祭運営スタッフ側と共有した。今年度はそれらを運営側・現地プロ2年生と協力して実行することで、より精度の高い解決案を示す。

【プロセスと成果】



【成果 1】



【成果 2】



【成果 3】

成果1: 4月から後輩の地プロメンバーと積極的に繋がり、WMDF事業側と構内説明会の企画の接続・開催

成果2: 掲示の少なかった五稜郭周辺の建物をメンバー全員でお願いに回り、新たな掲示所4つを開拓した。

成果3: MTG初参加から、芸術祭終了までの学生スタッフのようすを撮影し動画にまとめ、SNSに記録。

成果4: 芸術祭期間中に、WMDF公式Instagramと本地プロアカウント【@hayonsu.chipro_15】を共同投稿で連携させ、発信効率を向上させた(ストーリーでリアルタイムのスケジュール配信という新しい試みも)。

- ① 本地プロアカウントに学生としてのWMDFへの取り組みや思いが蓄積されている。
- ② WMDFと協働して活動する際に外せないと考察した項目を、以下【統括と反省・今後の課題】に今後のメンバーに活動案として提案する。

【総括と反省・今後の課題】

1. 次年度の地プロでの活動に自らの経験を生かしてもらう

そのためには、後輩とのコミュニケーションの丁寧な積み重ねが欠かせない。例えば、昨年度の説明会で行った内容を2年生に共有する方法が分からず告知が遅れ、昨年より参加者が減少した。その背景に、運営と彼らに接点を作りつつ、3年生がどこまで企画に関わって良いのか理想の状態を設定し切れなかった点がある。それを踏まえ、スタッフ説明会を経験した学生が2年生の悩みに答えながら企画立案を手助けする手順を解決策として挙げたい。4月からWMDF側とつながることで、本プロジェクトの計画を立てるよいスタートにつながり持続性が高まると確信する。

2. 芸術祭成功の背景に関わるスタッフの参加動機に焦点をあてる

今回の動画では、地プロメンバーのWMDFに対する反応と感想を記録した。目的は、今後のスタッフ説明会でスタッフのやりがいをリアルに感じてもらうためである。メンバーの留学の関係で記録内容を深めるまでには至らなかったが、後期も継続していれば、函館に住む大学生がWMDFスタッフの役割にどんな意義を感じるのかじっくり話す時間をとっていた。その考察をもとに、いまの大学生に響くスタッフの魅力ややりがいの伝え方を工夫することで、次世代を担うWMDFスタッフのリーダーが育つ可能性が高まるのではないかと予想する。

3. SNSの閲覧者にファンをつける

成果からもわかるように、2023年の芸術祭ではSNSの機能を「記録と連携」を目的に使用している。これは、昨年度のアカウントを引き続き使用したことから、SNS使用の目的を「発信」から「記録」に転換させて得た気づきである。よって、今年度は閲覧数より投稿する内容をできるだけ時系列に、活動内容を後から見ても理解できるようスピードを重視した。さらに、この新たな挑戦で、スタッフと運営側が投稿の共有作業に慣れることができた。この経験を踏まえて、来年度以降は閲覧者の存在をより意識し、「学生がWMDFの活動に参加している姿」でより広い年代に芸術祭と本地プロが応援されるシナリオを作れないか検討したい。

(ファン数値測定方法の例)Instagramストーリーのタップ数: 現在1ストーリー3タップの変動を観察

【地域からの評価】

WMDF (World Music and Dance Festivalの略)

Coreメンバー地プロ担当: 柴田 英実 様より

担当者として準備期間中や芸術祭期間中、学生のやりたいことを率先し、自立して活動してくれることがとても助かりました。当日のボランティアスタッフという関わりだけでなく、動画などの成果物を残してくれたことに心より感謝しています。今回のように3年生が引き続き関わってくれる事で、前年にできなかった課題等を克服したり経験を活かしたりしたのは大きいと思いました。

コロナ禍で芸術祭を通常開催できず、地プロとの繋がりを再構築する必要がある中、2022年は3日間の開催という中で、学生が主体的に率先して活動し、2023年は芸術祭を経験している3年生が2年生を繋いでくれたおかげで最初の説明等が省かれ、説明会の準備やポスターの配布のサポート、Instagramでの共同投稿など、今までにないほど地プロと実践的な活動ができたと思っています。

今年も2023年の芸術祭を経験した学生が、個人でもスタッフとして関わってくれることを切に願います。

【その他】

▶地プロでのチームワークについて学んだこと

・昨年度から引き続き、1つの行動計画に2-3名のチームだった。この人数だと小回りがきき、全員がそのテーマに参加できる(リーダーが困らない)。

・地プロ内でのグループ分けに関係なく、メンバー全員のスタッフ参加を強く勧める。設定テーマに必ず繋がるため、最終的にwin-winである。

▶今後の取り組みについて

2024年に取り組みたいことは、芸術祭に参加する学生スタッフに焦点を当てたインタビュー・記録である。それらから芸術祭に関与して得られる利益・価値を考察し、今後の大学説明会の資料として運営側に提供したい。

なお、今後は地プロとしての継続はせず個人の希望で活動を行うものとする。すでに、今年の芸術祭へのスタッフ参加を希望しているメンバーもいる。

Project	地域協働専攻 国際協働グループ
	E05 道南と青森におけるオシラサマ信仰の現在

メンバー	[学 生] 鳴海 麗/下山 昂大/藤田 月夜/中居 美穂/駒木 希奏 [担当教員] 村田 敦郎/今在 慶一郎
------	---

【背景】

オシラサマとは、東北地方で家の神として祀られており、多くは男と女の夫婦の神様で一對のご神体が作られている。その由来には馬と娘の悲恋物語があり、カイコの起源と養蚕に関わる神とされるが、家や地域によってその祀られ方は様々で、多様な役割をもっている。またアソブことが好きな神とされ、民間の女性宗教者と関わりの深い神様である。

昨年度、道南におけるオシラサマ信仰の現状を調査し記録した。その結果、オシラサマを祀る神社・寺院などの宗教的コミュニティはほとんど無くなり、個々の家庭において祀る人が残っているということ、1985年の渋谷道夫の調査から、函館近辺に200対以上のオシラサマを推定していたものの、大幅に減少してしまったことが明らかになった。

【目的】

オシラサマ信仰を通じた津軽海峡文化圏における共通の文化要素、差異の明らかにする。特に本年度は、津軽との文化交流についてまで視野を広げ、津軽地方のオシラサマ信仰の現状を把握し、道南のオシラサマ信仰の状況を比較し、考察する。また、道南における現在と過去のオシラサマ信仰の比較を行う。

【概要】

道南のオシラサマ信仰のルーツにあたる津軽でのフィールドワークと、昨年度から続けてきた道南におけるフィールドワークを通して、道南の民俗文化であるオシラサマ信仰の現状を記録した。青森県弘前市にある久渡寺で出会った住職やオシラサマの祀り手へのインタビュー、函館市にいるオシラサマを祀る個人や信仰に関わる宗教者へのインタビューの結果から、道南のオシラサマ信仰について考察した。

【プロセスと成果】

前期は、道南と津軽のオシラサマ信仰の比較を通して、女性宗教者との関わりや信仰の衰退がみられるという点で共通していることが明らかになった。津軽におけるオシラサマは、町内会で信仰が維持されているケースもあり、血縁と地縁に支えられた宗教縁をもつ民俗文化である一方で、それらの縁が希薄化した道南・北海道におけるオシラサマ信仰の宗教縁は、意志縁によるところが大きいということがわかった。

後期には、現在の道南のオシラサマ信仰について考察した。過去と比較して最も特徴的なのは、信仰が法人化した宗教団体ではないことである。自身の団体に名前をつけず、特定の宗教もなく、個人の集まりで活動しているという点は、現代のニーズに合った祀り方といえる。また、オシラサマ信仰に関わる宗教者自身がセンセイやカミサマ、イタコなどの民俗呼称を自称していないことも現代の道南の信仰の特徴である。



函館市の個人宅で祀られている
オシラサマ



アカデミックリンクへの参加

【総括と反省・今後の課題】

前期は、久渡寺でのフィールドワークを通じて、津軽でのオシラサマ信仰を調査・分析し、昨年度までの道南の進行状況との比較をすることで、道南におけるオシラサマ信仰の特徴がより明らかになった。また、青森と道南の間には、オシラサマやそれに関わる文化を通じた活発な交流があったということもわかった。

後期は、アカデミックリンクへの参加を通して調査成果を発表することができた。さらに、道南のオシラサマ信仰の過去と現在の比較を行い、オシラサマを祀る人や巫者が少なくなっていること、信仰の個別化が進んでいることがわかった。

活動を通して、目的であるオシラサマ信仰を通じた津軽海峡文化圏における共通の文化要素、差異を明らかにすることができているように感じた。また、後期に久渡寺とかかわりのある函館在住の宗教者へのインタビューも行ったことで、前期の活動の成果をより深めることができた。久渡寺でのフィールドワークで出会った道南のオシラサマの祀り手に対して、追加調査を行うことができたのも大きな成果であった。

今後の課題として、引き続き調査を行い、函館市内でさらにオシラサマを祀っている個人や、信仰を支える宗教活動をしている方を探すこと、そしてそれらの現状を記録していくことが挙げられる。

【地域からの評価】

11月にアカデミックリンクに参加し、ステージ部門で優秀賞を受賞した。本地域プロジェクトの民俗調査の活動が、地域内で一定の成果として認められたといえる。

また、インタビューにご協力いただいた方々から、激励の言葉をいただいた。

【その他】

年間スケジュール

■前期

4月 久渡寺調査の準備。資料の精査、質問項目の作成、調査対象の選定等

5月 久渡寺へのフィールドワーク
⇒住職と奥様、オシラ講への参加者(特に北海道出身者)とカミサマにインタビュー調査

6月 フィールドワークの資料整理。函館における追加調査⇒函館からの参加者に再度インタビュー

7月 調査資料のまとめ

■後期

11月 アカデミックリンク参加 ステージ部門

12月 久渡寺とかかわりのある函館在住の宗教者へのインタビュー

Project E07	地域教育専攻 高校生の地域調査・探究活動をサポートするプロジェクト
メンバー	[学 生] 小林大雅/福田誠也/高橋洋平 [担当教員] 山口好和/奥田秀巳
<p>【概要・目的】</p> <p>高校では、2022年度から新しい学習指導要領による教育活動が実施されている。そのうち、教員間の協議や創発的な教材開発が必要な取り組みが「総合的な探究の時間」である。北海道立函館西高校では、2023年度にこれまでの取り組みを見直して、新しい「探究」の学習活動を実施するべく準備を進めている。本プロジェクトでは、主に中学校、高校での学習活動、単元・教材づくりに関心のある教育大学生(必要があれば小学校も含む)が、高校1・2年生の課題追究、資料調査などにおいて、サポートを行い、「総合的な探究の時間」における深い学びの実現に向けたサポートをすることを目的とする。</p>	
<p>【プロセスと成果】</p> <p>私たちの活動から、探求的な学習を実現するため、「1課題の設定→2情報の収集→3整理・分析→4まとめ」のプロセスにおいて問題発見はできているものの、「問い」の設定に苦労していることが分かった。</p> <p>そこで、高校と大学を行き来しながら、高校生と対話し、「問い」を立てることに焦点を当てて活動した。実際に高校の「総合的な学習の時間」に訪問した際に苦戦している生徒に対して、先行研究を調べるアドバイスや生徒が興味を持っている事象がどのように地域と関わっているのか、それを探究することでどのような効果が地域にあるのかを深堀しながら一緒に学びを深めた。</p> <p>その結果、1課題設定→2情報収集の過程をスムーズに行うことができ、「問い」の設定を生徒が自分自身で行うことができていた。また、ワークショップの活動での高校生との哲学対話を通して、他者と交流し、自分の考えをまとめ・話すという活動から、探究のプロセスにおいて3整理・分析を中心に高校生の探究を深めることができた。</p>	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <p>研究活動の様子</p> <p>高校訪問の様子</p> </div>	
<div style="text-align: center;">  </div>	
<p style="text-align: center;">活動の振り返りの様子</p>	

【総括と反省・今後の課題】

今回の活動では、実際に複数の高校を訪問したり、ワークショップを通して高校生との交流を行った。その中で、「総合的な探究の時間」における、生徒の探究への取り組み状況や教員側が授業を運営する上で、生徒に対してより実践的で効果がある学びを提供するための方法や運営していく際の課題などを学ぶことが出来た。それらの学びを生かした上で、実際に私たちが、「大学生」としてサポートしていくためにはどのような方法があるのかを考え、実践する事が今後の課題である。

また、展望としては、市立函館高校と附属函館中学校の事例から「持続的な探究活動のサポート」が必要であると考え、生徒の探究活動をより深いものにしたい。そのために学校への訪問を定期的なものとし、関係を築きながら活動を続けていきたい。



発表会の様子①



発表会の様子②

【地域からの評価】

訪問した高校からは、今後の探究における協働についても提案があった。今回で本プロジェクトは終了となるが、今後も機会があれば、各学校と協働して高校生の探究活動をサポートする活動を行いたい。

【その他】

年間スケジュール

5月～7月

総合的な学習の時間の調査/実施高校の調査

9月～11月

哲学ワークショップの参加

12月～1月

市立函館高校/西高校への訪問

1月～2月

活動のまとめと考察